

創刊35周年を迎え、ますます面白く。

季刊

中 医 臨 床

CLINICAL JOURNAL OF TRADITIONAL CHINESE MEDICINE

●定 価：本体 1,571 円+税 送料 210 円 ●1年予約：本体 1,571 円+税 4冊 送料込
●2年予約：本体 1,500 円+税 8冊 送料込 ●3年予約：本体 1,429 円+税 12冊 送料込

「ツボを薬のように考えてはいけない」今、中国でこんな声があがっている。 穴性の何が問題なのか！？

穴性の概念は民国時代にはじめて提起され、60年代以降、中国の鍼灸界で一定の認識を得てきた。その穴性について、近年、否定的な声があがってきている。

「ツボの作用を薬の作用と同じように考えることはできない」というのが、一致した指摘であるが、昨年春、北京の中国中医科学院鍼灸研究所を訪れ、穴性に反対する2人の研究者に会って話を聞いた。

【第1弾】趙京生氏に聞く

「穴の研究は鍼灸の特性にもとづいて」(134号)

趙京生氏は、穴性は民国時代にはじめて提起されたときから、概念も定義も曖昧だったと指摘したうえで、薬性を置き換えた穴性にはっきりと反対の立場を示す。趙氏は、穴の研究は鍼灸が本来もつ特性にもとづいて行わなければならないと強調する。

【第2弾】黄龍祥氏に聞く

「ツボの主治症表記の標準化と鍼灸の弁証論治」(135号)

黄龍祥氏は、中薬の効能を模倣した現行のツボの効能表記——いわゆる「穴性」に疑問を投げかける。穴性については、90年代からツボは薬性化できないという見解が示されたが、黄氏の主張はさらに進んで、ツボの主治症を標準化することで鍼灸独自の弁証論治体系の土台にしようとしている。

朱氏頭皮針の開発者・朱明清氏寄稿

注目記事

「刺鍼による脳血管障害治療は本当に有効か？」(135号)

近日発行 6月号(通巻137号)では、鍼灸文献研究の第一人者・李鼎氏(上海中医薬大学)のインタビューを掲載します。

詳しくは当社ホームページをご覧ください。

<http://www.chuui.co.jp>



東洋学術出版社

ご注文は、メールまたは
フリーダイヤルFAXで

FAX.01 20-727-060

〒272-0823 千葉県市川市東官野1-19-7-102 / 電話047-321-4428 / E-mail:hanbai@chuui.co.jp / ホームページ●<http://www.chuui.co.jp>

最近号の読みどころ

その1

鍼灸臨床でいかに経絡弁証を運用するのか。

「経絡弁証は鍼灸臨床体系の核心」 趙吉平 (132・133号)

鍼灸の臨床において、経絡弁証が重要であることは論を俟たない。しかし、その重要性が強調されながらも、現在の中国の教材では、内科の弁証方式に偏っていて、鍼灸の臨床における経絡弁証の存在感が稀薄だとも指摘される。

そこで、北京中医薬大学東直門医院の趙吉平氏に、鍼灸臨床における経絡弁証の役割と方法について、2号にわたって総

括してもらった。132号では、おもに診断面における経絡弁証の役割と方法を、133号では、治療の面において経絡弁証をいかに運用するのかを紹介する。

趙氏は、経絡弁証は治療に用いるべきツボや経絡を選択したり、どの刺灸方法を用いるかを検討したりする際の指針となると強調する。

その2

難治性の麻痺に苦しむ患者に希望の火を灯す針。

朱氏頭皮針特集「朱氏頭皮針、再び！」 (133号)

朱氏頭皮針は、痛み全般、慢性疾患、麻痺だけでなく、急性の症状や難治性の病気に広く適応する。特に脳梗塞後遺症や脊椎損傷をはじめとした難治性の麻痺に対して、即効性のある改善効果をあげることから、いまから30年前に、世界に一大センセーションを巻き起こした。

2013年3月、その朱氏頭皮針の開発者・朱明清氏が来日講演し、進化した頭皮針の全貌を明らかにした。

133号では、「朱氏頭皮針特集」と題して、3月の来日講演会

のレポート、改訂版の訳者・高橋正夫氏による解説、そして「朱氏頭皮針とはどんな針か」を朱明清氏が答えるQ & Aを掲載した。

新しい朱氏頭皮針では、全身の疾患に対応した19の治療区を設けたことで、治療に応用し易くなり、さらに治療効果を高めるうえで欠かせない「導引」の内容や具体的な方法についても、惜しげもなく開示している点が眼目だ。

その3

背部俞穴の刺鍼は直刺？ それとも斜刺？

「背部俞穴の刺鍼法」 浅川要 (135号)

(1) 背俞穴への直刺、(2) 背俞穴から督脈への斜刺、(3) 膀胱経2側線への斜刺、(4) 膀胱経1側線への横刺には、その効果においてどのような違いがあるのだろうか？

浅川氏自身は、背部俞穴は基本的に直刺すべきものと考えているという（当然、その奥にある臓器への損傷を避けるため浅めの刺鍼になる）。ところが、中国から届く鍼灸書は押し並べて背部俞穴は斜刺である。しかし、歴史的にみると、必

ずしも斜刺とは限らないという。

そこで本稿では、『鍼灸甲乙経』『千金方』『外台秘要』『鍼灸資生経』『鍼灸聚英』『鍼灸大成』『類経図翼』『医宗金鑑』、承淡安、『中国鍼灸学』（程莘農主編・1964年）、『鍼灸学』（上海中医学院編・1974年）、『鍼灸学〔経穴篇〕』（天津中医薬大学+後藤学園編）を並べて、歴史的流れから、背部俞穴の刺鍼法を検討する。そこから見えてくるのは！？

その4

日本の臨床に適合した穴性構築に向けて。

「穴性論」 百会 (133号)・膈俞 (134号)・湧泉 (135号)・陽陵泉 (136号)

「理・法・方・穴・術」の一貫した鍼灸の弁証論治体系において、「法」に対応したツボの作用＝「穴性」を、いかに日本の臨床で使える形で整理できるか――。128号の合谷から始まった本連載も、136号で9穴目を迎えた。

本連載では中国の資料をベースにしながらも、それを鵜呑みにせず、日本での臨床経験から答えを導きだそうとしている点が眼目である。

「集約的穴性論」は従来のように穴性を並べるだけの記述ではなく、ツボの作用を一つの流れのなかで捉えようとしており、これまでにない意欲的な試みといえる。そのほか、組み合わせるツボの作用（「対穴」）、「古典的な主治と自身の臨床的実感をすり合わせて総括する試み」「現代の研究論文の考察」「治験例」と、5人の臨床家がそれぞれのテーマで分担して執筆する。